



総合雑誌の旗手

青柳正美編集長に聞く

> 2 <

総合雑誌という雑誌形態は、総合商社同様、欧米にみられない日本独特の産物。明治二十年創刊とこの道のパイオニアとして意の長さを誇る八中央公論の編集長として、青柳さんは現在における総合雑誌の役割と地位をどうとらえているだろうか。

「いま中閱讀み物といわれるものは八中央公論が生み出したものです。信じられないでしょうが花柳界のゴシップ記事までありました。最近そうした総合雑誌のもっていた部分をむしろとりやめメント(細分化)した雑誌が多くなってきたわけですが、一つの先見的な議論が行われて社会的方向性を示して行くという総合雑誌の知的役割は基本的には変わっていません」

現在の部数は公称十八万。変化はほとんどないが「これだけビジネス、政治、行政の現場でさまざまな進歩があるのに読者がふえないのはおかしい。われわれの努力不足です。全体としては新しい雑誌に切り崩されて」、ふえるどころか減る心配さえあるという。

その中で、やはり総合雑誌の核としてオビニオンに存在理由を求めているのですか。

「オビニオンがあれば生き残れるかというところでもないでしょう。かつてのように絶対的権威をもつ科学、社会科学(含む)は、いまの学問の中に存在しない。権威によりかかったようなオビニオンへの成り立ちはなくなっています」

読者をひきつけ、リードする人が少ない……。

「いま、議論を出せるのはこんな人

総合的な編集の打ち出し方模索 クオリティ考え直すとき

か——新岩波文化人といわれる山口(昌男)さんのような人か、一方で堀尾太一さん、長谷川慶太郎さんといった人か、官庁エコノミストか。そしてこういふ人たちが国家目標を議論する担い手になれるかですね」

論壇という枠組みはまだあると考えていますか。

「ビジネス雑誌では読者であり同時に筆者であるという互換性があるので、総合雑誌にもそういう傾向が出てきています。たとえば実務家、経営者、政治家あるいは官僚の登場がそうですね」

慶天文学部英文科出の四十八歳。三年前、現在の地位につくまでは、八婦人公論、八経営問題各編集長をつとめてきた人らしい視点である。

時代も変わったが、八中央公論も変わった、保守化したという世評をききに耳にしますが……

「あまり意識してませんね。八中央公論は、自由主義、リベラルなものを編集のバックボーンに持ち続けてきたのであってそれは変わりません。宮崎(勇)さんの論のような、平和志向の経済学に警戒される性格のものがメイン・トーンです。ああいう実態をふまえた議論が八中央公論の伝統的なものじゃないかと思えます。永井陽之助さんとか中

島雄雄さん、山崎正和さんらの登場するひん度が高い。現実主義者の牙城(がじょう)といわれたりもするわけですが、グローバル化しようとする意識は少なくともほくにはないのです」

、制なり権力に対するスタンスをどうとっているか、その見方の問題ともいえるようなだ。

「やっぱりジャーナリズムは政治権力に対して批判的であることが基本だと思います。何でもかんでも批判するというのではなくて、そういうパワーというものに対して知性がどれだけ緊張感をもちつつあるかという事です」

それにしても総合雑誌は「重大な転機に立たされている」といふ。「ここで考えていることは全体の誌面構成もさることながらクオリティをもう一遍じっくり考え直すという内容です。これまでクオリティといえるのは内容だけ。いまクオリティというときは、印刷技術とか美しい活字とか写真と文字の組み合わせとか総合的な編集の打ち出し方が重みを持ってきているのです。いまは水面下で模索をしている段階ですが、表面に出てくるのは間近です」。

というところある時期、八中央公論が面目一新というところも……。

「もちろんあります」。

(佐々木喜久記者)